

“三なし”にめげず『しろねふるさと塾』実施

新潟県白根地区少年補導員連絡協議会

私たち新潟県白根地区の少年補導員は、新潟市の南に隣接する白根市、味方村、月潟村の住民で、新潟県警察本部長から委嘱を受けて活動をしている男女十五人の仲間たちです。（同地区は平成十七年三月二十一日から新潟市に合併されました）

白根地区は新潟平野の真ん中、大河信濃川と支流中之口川に沿った地域で、お米はもとより桃、梨、ブドウと果樹の栽培が大変盛んなところです。毎年、雪解けが終わると四月中旬から下旬にかけて梅、桜、桃、梨の花が次々と咲き、何回もお花見が楽しめます。

月潟村は、鞍馬天狗でおなじみの「角兵衛獅子」発祥の地でもあり、今でもその伝統を受け継ぎ小・中学生が六月の地蔵祭りには獅子の舞いを披露します。また、白根市と対岸の味方村では、中之口川を挟んで毎年六月上旬に畳二十四枚分の大きさのたこ凧が舞うおたこ大凧合戦が行われます。おとなたちはもちろん、小・中学生も堤防の上でたこ凧揚げ大会や、対岸のたこ凧同士を絡ませ合い綱引き合戦に興じるといって大変勇壮な節句の行事があります。

人口約五万人の当地区は、新潟県三十三警察署の中でも小さな方で、そのため少年補導員の委嘱数も隣接する大きな署の約半分です。活動面積が広い割には、活動人員が少ないので、いま一つ不満が残るときがあります。

当少年補導員連絡協議会も、創設以来たくさんの活動を行ってきましたが、現実には「人なし、地恵なし、予算なし」の言葉どおり、“三なし”でなかなか思ったような活動ができませんでした。そこで、ここはいつそ発想の転換を図って、何かがないとできない活動ではなく、逆に何もなければこそできる活動をと、いろいろ考えてみました。

そこで考えついたのが『しろねふるさと塾』です。三なしの環境の中で、自分たちの手作りの活動を、子どもたちと一緒にできる活動をしたい、そんな思いで十三年にスタートしました。『しろねふるさと塾』のしろねは、もっと自分たちの住んでいるしろね白根地域をよく見て回ろう、「知ろうね」という意味で名づけました。

もっと地域のことを「知ろうね」

『シロウネふるさと塾』活動の対象者は小学校五年生です。夏休み、六年生はスポーツや課外授業で予定が多いため、五年生にしたのです。毎年、地域の小学校を三校選び、各学校の先生方に協力をいただき夏休み前に各校十五人程度の活動の参加者を募ります。参加費は、一人千円、これはお昼代と保険料、ペットボトルロケットの材料費です。夏休みの後期、八月二十日過ぎに実施します。

当日は朝八時三十分に各小学校に集合、各校区の少年補導員スタッフが子どもたちを迎えます。送迎、移動は市教育委員会のバスで行います。

最初の目的地は地域の消防署です。消防署の玄関前で『シロウネふるさと塾』の開校式を行い、朝のあいさつ、班分けをして『ふるさと塾』活動の始まりです。

子どもたちは消防署職員のお話の後に放水訓練や消防車搭乗などを体験します。水でパンパンに膨らんだホースを持ち、防護服を着せてもらったの放水訓練はみんな初めての経験で、放水される水の強さに全員、驚きの声を上げていました。レスキュー隊の訓練風景では、タワーの上からロープ一本で降りてくる隊員の様子を、目を丸くして見学しました。そして消防車に乗せてもらい構内をぐるっと一周すると、後ろの座席に乗った子どもたちからは、意外に硬くてごつごつした消防車の座席シートに、悲鳴が上がりました。



水の強さにびっくりしました

次は会場を白根カルチャーセンター駐車場に移しての交通安全教室です。白根署交通課の署員による交通ルールとマナーのお話の後、新潟県交通機動隊白バイ隊の皆さんのご協力で、訓練走行の見学です。普段なかなか見ることのできないジグザグ走行や急発進、急ブレーキなどを見せてもらい、最後は全員で白バイにまたがっての記念撮影。隊員の皆さんは、エンジンをかけてくれたり、サイレンを鳴らしてくれたりサービス満点です。実際のパトカーや白バイに触れる体験は、交通安全啓蒙の観点からも貴重なことに思えます。顔を見ると、どの子どもたちも大満足の様子でした。

夢中でペットボトルロケットを制作

地元観光農家の施設を借りた、ぶどうの木の下での昼食の焼き肉大会が終わると、いよいよ本日のメインイベント『ペットボトルロケット大会』のスタートです。ロケット制作は、当地域の小学校の理科室や工作室をお借りして行います。参加者を北の地区から募集したときは南の小学校、西の地区から募集したときは東の小学校と、普段なかなか行けない小学校に会場をお願いします。これは子どもたちに自分の学校とはまた違う雰囲気を体験してもらいたいからです。

まず最初は教室の中でのロケット制作です。午前中はペチャクチャおしゃべりしていた子どもたちも、この時ばかりは真剣に取り組んでいます。スタッフの補導員はなるべく口も手も出さずに、子どもたちが自分の力だけで作るように見守っているつもりですが、これが案外難しいのです。ついつい口と手を出してしまいます。そうでなくても私たちはおせっかいやきの集団ですから。

子どもたちはペットボトル工作専用のはさみを器用に使いながら、二本のペットボトルを分解し、再び組み上げていきます。一本はロケットの本体に、もう一本は先端部分と噴射口のスカートにと、だんだん形になってきました。作り始めてから一時間半、悪戦苦闘しながらもロケットが出来上がりました。今度は、本当に飛ぶのかどうか全員が心配そうです。

さあ、完成したロケットを持って全員、グラウンドに集合です。大会本番前の打ち上げテストです。最初にスタッフが用意したペットボトル製の計量カップで水を量り、ロケットに入れます。そのペットボトルの中に空気圧を込め、押し出された水の噴射で飛び上がる仕組みです。



ペットボトルを使ったロケット作りに真剣そのものです

バレーボールの空気注入ノズルを差し込んだゴム栓をつけると準備オッケー、いよいよ打ち上げテストです。ドキドキしながら発射場に向かい、動力源になる空気を注入するための自転車の空気入れをセットし発射準備完了。子どもたちは真剣に空気入れを押し始めました。

「上がった、上がった」歓声が上がりました。二回三回と発射練習をしているうちに要領がつかめてきたようですが、やはり力のある男子児童がうまく打ち上げているようです。でも、本番は果たしてうまくいくでしょうか？

飛んだ！ 体育館の屋根よりも高く

いよいよ大会の始まりです。最初はいくつかの班に分けて予選を行います。製作したペットボトルロケットは、ゴム栓をただけの簡単な作りで発射台もないので、垂直に発射して高さだけを競うものです。一番高く飛ばした子どもが勝ち残ります。ジャッジは、参加している子どもたちとスタッフの補導員です。全員で勝負が決まります。わいわいキャーキャーと歓声を上げながら、違う小学校の児童にも応援の声を上げています。中には体育館の屋根よりも高く飛ばす子どもや、風に流されてしまうロケット、女子の中にも堂々と男子に負けない高さを飛ばす子どももありました。

予選が終わり準々決勝、準決勝と進んできました。おやおや、練習に時はあん

なに高く飛ばしていた男子児童が次々と敗れてしまいました。圧力をたくさんかけて高く飛ばしてやろうと、ゴム栓をきつく入れ過ぎてしまったため、空気入れを押すときの衝撃で差し込み口がロケット本体から外れてしまったようです。勝負の世界は厳しいものです。ザンネン！いざ本番となるとなかなか思うようにいかないものですね。

さあ、最後の二人になりました。男子と女子の一騎打ち、いよいよ決勝戦です。緊張しながら二人の選手は綿密に水の量を量り、ロケットにゴム栓をして、空気入れのある発射台に向かいセットを完了しました。

「用意、スタート」。スタート係のかけ声とともに、一斉に空気入れを押し始めました。五回、十回、十五回...力強く押ししているといきなり「プシュウ」と大きな音と水しぶきとともに、まぶしいくらい真っ青な夏の夜空にロケットが打ち上がりました。もう一台のロケットも同様に無事飛び立ちました。打ち上げられたロケットはやがて降下を始め、大歓声の中、大会は終了しました。

楽しかった『シロウネふるさと塾』も表彰式、閉会式で終了です。お土産の自作のペットボトルロケットを手に、バスに乗り込み各学校まで戻って解散します。バスの中から手を振ってくれる子どもたちに私たちも力いっぱい「さようなら、ありがとう」の声を上げました。

まさにこの瞬間こそが、私たちを何よりも充実した気持ちにさせてくれるひと時なのです。スタッフのTシャツに残る汗のにおいが、ひと夏の思い出となりました。

予期しなかった感動 本当にありがとう

この活動を始めて二年目のことでした。二学期が始まって間もなくのころ、白根警察署生活安全係長をお訪ねしたとき「U小学校の校長先生から連絡がきました」と言われました。ひょっとして、ロケットを家に持ち帰り打ち上げて遊んでいたときに事故かけがでもしたのではないかと、一瞬頭の中を不安がよぎりました。しかし、返ってきた答えは予想とはまったく逆のものでした。

「実は、優勝したA君は不登校の子どもさんだったそうです。そのA君が、二学期の始業式の日一番に、優勝した時の自作のペットボトルロケットを両手で抱えて校長先生のところへやって来て、『先生、僕、優勝したんだよ』とうれしそうに報告してくれたそうです。校長先生も、A君が再び登校してくれてきたことにとても喜んで、すぐにお礼の連絡がありました」

それは良かった。優勝したA君のくしゃくしゃになって喜んでくれた顔が思わず脳裏に浮かびました。

人間の願望を超えて起こってしまう出来事、私たちの力の及ばない出来事、そんな予期しない出来事でした。『シロウネふるさと塾』開催にご協力していただ

いた先生、この活動に理解を示し参加を許してくれたご両親、一緒に行こうと言葉をかけてくれた友達、そして自分自身で参加してくれたA君、偶然に優勝してしまった『ペットボトルロケット大会』。今回の結果をたまたま生んでくれたすべての出来事に感謝せずにはられません。

後日、夏の反省会の席で会員にこのことを伝えました。参加者全員から「良かったね」と感激の声が上がりました。

私たちは参加者個人の環境は知り得ません。もちろん参加者全員に分け隔てなく接し、私たち自身も参加をして楽しむことを旨とした活動です。私たちがA君に何かをしてあげたのではありません。反対にA君から私たちが何かをもらったのです。この活動を計画し実施した補導員全員が、また頑張っってやっっていこうという勇気をもらったのです。そんな素晴らしい奇跡と出合うために、ぜひたくさんの方に、いろいろな活動に参加してほしいと思います。

A君、感動と勇気をくれて、本当にありがとう。